

## 古筆切拾塵抄・続(十三)

——入札目録の写真から——

小島 孝之

### はじめに

昭和三年の入札目録を取り上げ続けているが、特に昭和三年にこだわっているわけではない。書棚の同じ棚に並んでいるのを取り出しているに過ぎず、ただの惰性である。事の次いでに今回も昭和三年の目録を開いてみる。いずれ取り上げたいと前(続・十一)に触れた松方公爵家の目録にしよう。

昭和三年三月二十六日入開札された『前公爵松方家蔵品入札目録』である。前回までに取り上げた大型の目録と異なり、縦二四・五センチ、横一七センチ程のやや小型の目録である。公爵家の目録としては地味なもので、内容も探幽・応挙が多

く、墨蹟もそこそこといった感じである。

松方家が美術品を売却した理由はこれまでの目録と同様、昭和金融恐慌で経営する銀行が破産したからである。ここで、目録に「前公爵」と記されているのも同じ理由である。今更の説明の要もないと思うが、ごく簡単に触れておくと、当時の松方家の当主は、総理大臣も務めた松方正義の長男の巖である。父の正義が亡くなった後、巖が家を継ぎ、父の爵位「公爵」も継承した。貴族院議員も継承し、銀行経営に携わり第十五銀行の頭取になったが、在職中に大恐慌に見舞われ、銀行が経営破綻してしまった。巖はその経営責任を取り、私財を差し出し、貴族院議員を辞職し、爵位までも返上してしまった。それゆえ、「前公爵」と記されているのである。巖

はこれを機に一切の公職から退いたと言われている。潔い身の処し方ではあろう。

有名なのは巖の父、松方正義の方であろう。私のごく私的な体験に触れたい。那須開拓にまつわる話である。那須野が原は明治初期までは那須岳の噴火による溶岩に覆われた荒地であった。火山岩と砂礫に覆われた土地に雨はすべて吸い取られて水がない。農業も林業も出来ないという土地であった。ここに疎水を通し、農業可能な土地にしようという計画が持ち上がり、印南丈作・矢板武らが中心になって推し進め、殖産興業策の一環として伊藤博文・松方正義らが支援した。

明治十一年に千本松に観象台が設置された。明治十二年、十三年には開墾事業が始められ、十四年に大山巖や西郷従道らが開墾事業を始めた。明治十八年によく那須疎水が完成し、本格的な那須野が原の開拓が始まった。松方正義は明治十八年に農場経営を開始し、その農場が今も千本松農場として存続している。松方巖はこの千本松農場に別邸を建築し、多くの内外の要人や皇族たちが訪れた。その建物は今も農場の一角に現存しており、現在も使用されているようである。私はひと夏那須に遊んだ折に、千本松農場を訪ねたことがある。観光牧場として大いに賑わっていた。観光施設からやや

奥まった静かなところにその別邸があった。付近には訪れた皇族の植えた記念樹がいくつもあった。明治の面影がひっそり息づいている。

閑話休題。目録の内容について述べよう。前言したように、古筆資料は多くない。軸装されたものが二点と古筆手鑑が二点である。手鑑の写真は比較的大きく、印刷も比較的鮮明である。それらの多くは『古筆学大成』に原寸大ので真が収められており、収録された古筆切の多くは現在もあちらこちらの個人によって所有されているらしい。現存が確認できない断簡は、この目録から転写されている。ゆえに取り残された古筆切はごく少数であるが、本物が出現するまでは写真を共有すべきであろうと思うので以下に掲出することとする。

## 一

まず、掛軸装の一点物を掲げよう。消息と色紙であるから、厳密に言えば古筆切ではないが、『古筆名葉集』などでも古筆として扱われているので挙げることにする。

### 1 「八 佐理 消息」

書き出しに佐理の草名がある「離洛帖」の名で知られる有名な佐理の真筆書状である。あまりにも有名なもので、図版や翻刻はいろいろな所に掲げられているので、ここでは割愛に従う。

## 2 「夢窓 多賀色紙」

夢窓国師を伝承筆者とする色紙で、内容は漢詩であるようだが必ずしも明瞭ではない。国宝手鑑「藻塩草」に添えられた古筆了伴による筆者目録では、「多賀色紙」と書いた上から「三浦色紙」と訂正している。三井文庫所蔵手鑑「筆林」に付された古筆了伴による目録には、「三浦色紙、多賀色紙」と併記されている。当目録の見出しは「多賀色紙」としてある。「古筆名葉集」類では、単に「色紙」とされていたが、『増補古筆名葉集』（安政五年刊）に至って「多賀色紙」と固有名が付されたようである。了伴がこれを「三浦色紙」と改称した理由は不明である。

内容については、『増補古筆名葉集』が「草書五言絶句金銀砂子」としている。現時点で私の手元には本断簡を含めて七点ほどのデータがあり、確かに五言四行のものが多く、七言四行のものや、八言四行のものもあり、必ずしも「五言

絶句」ばかりではないようである。内容について吟味した報告に私はまだ接したことがないし、私自身も到底内容を吟味するだけの力量を持ち合わせていないので、今後の解明に俟ちたい。ここには図版を転載し、試みの翻字を掲げるが、解読出来ている自信は全くない。誤読は容赦願いたい。

（破損等で読めない箇所は■、該当する文字に思い至らない箇所は□とした。）（図1）

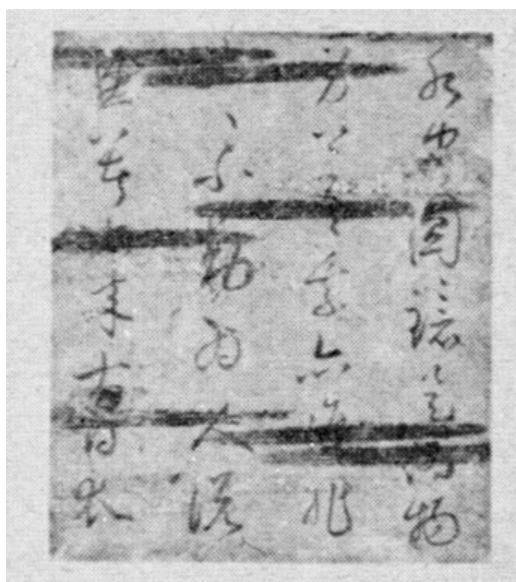


図1

(翻刻)

水■圓□是■物

身上有我亦■非

■、不動為人説

■□■来□□衣

## 二

次は古筆手鑑である。まず、目録の八六に折込みで挟み込まれている、「孤山集」と命銘されているものから取り上げよう。ここには二十三点の古筆切の比較的大きな写真が掲出されている。固有名を持つ有名な古筆切ばかりで、この手鑑の優秀さがしのばれる。極め札は写されていないので、掲げられた見出しをそのままここにも掲げることにする。

## 1、「貫之 高野切」

伝紀貫之筆「高野切」『古今和歌集』巻十九、一〇五三番の断簡三行である。「高野切」は三筆に分かれ、第一種が最も優れた筆跡とされ、第二種は源兼行の筆跡とされている。巻十九は第三種の筆跡である。当断簡は、『古筆学大成』に

「個人蔵」として収録されているが、小さい縮小図版なので現物からの撮影が出来なかったと思われる。あるいは、当目録の写真の転載かもしれない。翻刻は『古筆切資料集成一』にもあるので、ここでは割愛する。

## 2、「貫之 兼輔集切」

伝紀貫之筆「名家家集切」『堤中納言集』の断簡十行。『私家集大成』の「兼輔Ⅲ」51～54に当たる。写真は『古筆学大成』（個人蔵とある）を初め、『書道全集』、『日本名跡叢刊』等いろいろな所に原寸大の写真が掲載されているので割愛する。

## 3、「道風 小島切」

伝小野道風筆「小島切」『斎宮女御集』の断簡四行である。『私家集大成』の『斎宮女御Ⅳ』47に当たる。『古筆学大成』は原寸大の写真を収め、「個人蔵」と記している。よってこれも割愛する。

## 4、「佐理 筋切」

伝藤原佐理筆「筋切」『古今和歌集』巻十九、一〇三八、

一〇四二番の九行の断簡。これは藤原定信の真筆とされている。名古屋の関戸家に近年までまとまった冊子として保存されていたので、かなりの分量が復元されている。当断簡は『古筆学大成』や『名跡叢刊』にも原寸大の写真があるが、久曾神昇氏の所蔵品をまとめた『古筆切影印解説Ⅰ』の口絵に原色の原寸大図版が掲載されているから、割愛に従う。

# 5、「佐理 紙捻切」

伝藤原佐理筆「紙捻切」『道済集』(三〇〇番)の断簡三行である。『私家集大成』の本文とは多少相違があり、『新編国歌大観』の本文と一致する。『古筆学大成』、『名跡叢刊』に原寸大の写真があり、「個人蔵」と記されている。平成四年六月の根津美術館における「古筆名葉展」にも出品されているが、同展示図録には所蔵者名が示されていないので、詳細は不明だが、おそらく同館の所蔵ではないのであろう。これについても割愛する。

# 6、「行成 猿丸集切」

伝藤原行成筆「猿丸集」の断簡七行。『私家集大成』の「猿丸集」I 28、29番に当たる。元は三十六人集の一本とし

て書写されたものと考えられるが、現存は十葉ほどが確認されているに過ぎない貴重な断簡である。『古筆学大成』(個人蔵とある)、『書道全集』等に原寸大の写真があり、これも割愛に従う。

# 7、「小大君 香紙切」

伝小大君筆の「香紙切」『麗花集』の断簡七行である。『麗花集』は散佚歌集であり、「香紙切」は逸文を集成するため重要な断簡である。早く久曾神昇氏の逸文集成があり、『古筆学大成』がさらに逸文を増補したが、近年ではさらに高城弘一氏が精力的に逸文集成と詳細な分析を発表している。もちろん当断簡もすでに集成されており、写真もあちらこちらに掲載されているから蛇足は割愛する。

# 8、「公任 大色紙」

伝藤原公任筆「大色紙」か。内容は『古今和歌集』巻一、五三番歌の末句二行である。伝公任筆「大色紙」と称されているものは、菱唐草紋様の唐紙に、『万葉集』『古今和歌集』『拾遺和歌集』等の歌集の作者名、詞書を除き、歌だけを抜粋して散し書きにした書物から、色紙の形に切り出したもの

である。大型のものを「大色紙」と呼び、小型のものを「小色紙」と呼んでいる。本断簡は一枚の色紙から僅かに二行だけを切り取ったもので、筆跡も「大色紙」のツレと言えるかどうか、判断が難しい。料紙に一部ではあるが菱唐草の紋様が見えるので、ひとまずツレとしておくが、『古筆学大成』が本断簡を採用しなかったのは、やはり「大色紙」とする決めに欠けるからではなからうか。(図2)

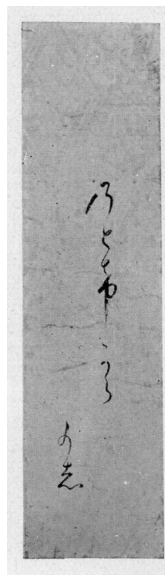


図2

(翻刻)

のとけから

まし

## 9、「行成 朗詠切」

見出しは右の通りであるが、実のところ、本断簡は伝源頼

政筆「平等院切」「和漢朗詠集」である。『古筆学大成』にはちゃんと「平等院切」の一葉として採用されている。同書には「個人蔵」としてあるが、小さい写真なのでこれも現物から撮ったものではなく、当目録からの転写かもしれない。二枚の断簡を貼り合わせており、前半の五行が漢詩で、『新編国歌大観』の歌番号六五九～六六〇番に当たり、後半二行が和歌で六六五番に当たる。漢詩の部分と和歌の部分を同時に鑑賞するために、こうした切り継ぎがしばしば行われる。既知の断簡であるから、これも割愛に従う。

## 10、「公任 巻物切」

『和漢朗詠集』七五八番の漢詩を書いたもの。ツレには『和漢朗詠集』以外の詩句を書いたものがあり、原本は秀句を抜粋したものと思われる。通常「詩書切」と呼ばれており、藤原定信の真筆と言われている。『古筆学大成』に原寸大の写真が掲載されており、「個人蔵」と記されている。よってこれも割愛する。

## 11、「定頼 烏丸切」

伝藤原定頼筆「烏丸切」『後撰和歌集』卷三、一三四～一

三五番の八行。この断簡も『古筆学大成』『名跡叢刊』『日本名筆全集』などに収められており、周知の断簡なので割愛する。

12、「俊頼 民部切」

伝源俊頼筆「民部切」『古今和歌集』卷十五、八〇三―八〇五番の八行。この断簡についても『古筆学大成』に個人蔵として原寸大の写真が収められているので割愛する。

13、「行成 朗詠切」

伝藤原行成筆「近衛本和漢朗詠集切」卷下、六一三番の四行の断簡。近衛家に伝来したのでこのように呼ばれる。現在、陽明文庫に所蔵される卷下の二帖は国宝の指定を受けている。美しい色変わりの唐紙などに書写されており、いつのころか脱落した断簡が諸所で愛玩されている。卷上の断簡はただ一葉が藤田美術館の手鑑にあるばかりで、他はすべて下巻の断簡である。本断簡も陽明文庫所蔵の卷子から脱落した下巻の部分である。この断簡も『古筆学大成』に個人蔵として原寸大の写真が収められているので割愛する。

14、「忠家 歌合切」

伝藤原忠家筆「柏木切」二十卷本歌合の断簡。『歌合大成』の二三六「永長元年五月五日權中納言匡房歌合」の六―七番に当たる。萩谷朴氏は『歌合大成』の解説中で当断簡を、「田中親美翁の写し置かれたものにより（中略）調査し得た」としているから、萩谷氏も原本は見えていなかったらしい。『古筆学大成』には個人蔵として原寸大の写真が載せられているから、原本が現存しているのである。よってこれも割愛する。

15、「俊忠 二条切」

伝藤原俊忠筆「二条切」二十卷本歌合の断簡。『歌合大成』五「寛平御時后宮歌合」の一六五―一六六番に当たる。『古筆学大成』にはこれも個人蔵として原寸大の写真が収められている。『歌合大成』の解説中には、「堀越家」の所蔵としてあるので、本断簡の松方家を出た後の所蔵者を示しているのかも知れない。これが現在の所蔵者と同じか否かは定かではない。これも割愛する。

16、「俊成 日野切」



藤原俊成自筆の「日野切」『千載和歌集』巻十一、六九四～六九六番の断簡。「日野切」は撰者自筆本としてその価値は計り知れない。『古筆学大成』にはやはり個人蔵として原寸大の写真が収められている。従ってここも割愛に従う。

# 17、「実朝 中ノ院切」

伝源実朝「中院切」『後拾遺和歌集』巻五、三七二～三七四番の十行。この断簡はどういうわけか『古筆学大成』に収録されていない。『古筆切資料集成 二』に翻刻があるのみなので写真を転載しておく。(図3)。



図3

## (翻刻)

九月盡日秋を、しむこ、ろをよめる

藤原範永朝臣

あすよりはいと、しくれやふりそはむ

くれゆくあきを、しむたもとに

九月盡日終夜惜秋こ、ろをよみ侍ける

あけはてはのへをまつみむはなす、き

まねくけしきはあきにかはらし

九月盡日よみ侍ける

法眼源賢

あきはた、けふはかりそとなかむれは

# 18、「基俊 多賀切」

藤原基俊筆「多賀切」『和漢朗詠集』巻上、二七九～二八一番の六行。藤原基俊の真筆ということが分かつている貴重な断簡である。『古筆学大成』は原寸大の写真を掲げて、「不二文庫蔵手鑑所収」と記す。この記述に従って推測すれば、「孤山集」という手鑑はすでに解体されたと考えるべきであろう。右の通りなので、割愛する。



## 19、「頼政 平等院切」

伝源頼政筆「平等院切」「和漢朗詠集」巻下、四四三～四四四番の五行。4のツレ。『古筆学大成』に個人蔵として原寸大の写真がある。小松茂美著『古筆』などにも鮮明な写真が掲載されているので割愛する。

## 20、「西行 白川切」

伝西行筆「白河切」「後撰和歌集」巻九、五四二～五四三番の十一行。巻一から巻十まで（おそらく上下二帖の上冊のみ）非常に多くの断簡が現存しており、百二十葉ほどが確認できる。巻十一以後の下巻は一枚も知られず、喪失したか何処かの蔵に埋もれているかのどちらかであろう。本断簡も『古筆学大成』に原寸大の写真がある。ただし、「個人蔵手鑑」「旧錦囊」とされているのが引つ掛かる。この「旧錦囊」が伊達家旧蔵手鑑「旧錦囊」のことだとすると、「旧錦囊」は大正五年五月に仙台伊達家の入札に出されており、現在も個人蔵で健在のはずであるから、「孤山集」と重複することは考えにくいのである。どう考えたらよいのか分からない。誤記であろうか。原寸大の写真が公開されているので割愛に従う。

## 21、「寂蓮 右衛門切」

伝寂蓮筆「右衛門切」「古今和歌集」巻十七、八八四～八八五番の六行である。これも非常に多くの断簡が現存しており、巻十六、巻十八を除く全部の巻の断簡が（数葉の模写を含めて）約百二十葉ある。その他に、巻十四の一冊が東京国立博物館に、巻十七の零本一冊が穂久邇文庫に、巻十九の一冊が徳川美術館に所蔵されており、また巻二の別本が北岡文庫に所蔵され、仮名序の摸本一巻も複製が刊行されているなど、大量の本文が確認されている。本断簡も『古筆学大成』に原寸大の写真が掲載されているので割愛する。

## 22、「宗尊親王 有栖川切」

「元暦校本万葉集」の断簡である。巻十、二六七四～二六七六番の六行。平安朝書写の『万葉集』では最も多くの本文を残している。「元暦校本万葉集」は、東京国立博物館に所蔵される古河家旧蔵本と高松宮旧蔵本（有栖川宮家から継承）以外の断簡が「有栖川切」、巻十四の断簡のみ「難波切」と呼ばれている。筆者名は様々な名が当てられており、巻十は通常、「源俊頼」または「藤原公任」の筆と称されることが多い。当断簡は『古筆学大成』に原寸大の写真が収め

られており、「不二文庫蔵」とされている。よってこれも割愛する。

### 23、「伊経 難波切」

「元暦校本万葉集」巻十四、三五五三～三五五四番の断簡である。前項に記した通り、巻十四なので「難波切」とされているわけである。原寸大の写真は『古筆学大成』（個人蔵）とある。その他に多数掲出されているので、割愛する。

## 三

次に取り上げるのは目録の九〇に載る無銘の古筆手鑑である。掲出される写真は八点到過ぎない。おそらく「孤山集」より格下の扱いなのだろうが、こちらは七点到極め札も写されている。残りの一点には見出しがないので、極め札のあるものはそれを見出しに掲げ、残りの一点には、「孤山集」同様に任意の見出しを付す。

### 24、「聖武天皇（琴山）」

伝聖武天皇筆「大聖武」「賢愚経」「五百盲兒往返逐佛縁

品」

（大正新修大蔵経393頁b3・b7・b17・b21）十行の断簡である。五行の断簡と五行の断簡を貼り継いでいる（右のbは中段を、aは上段を、cは下段をそれぞれ表し、洋数字は行数を示す）。大ぶりの堂々たる筆跡は昔から聖武天皇筆として尊重され、手鑑の巻頭に貼るべきものとされたので多数現存している。（図4）



図4

(翻刻)

阿羅漢道尔時阿難見諸盲人  
肉眼明淨又盡諸漏成阿羅漢  
長跪合掌前白佛言世尊出世  
實復奇特所為善事不可思議  
又此諸盲人特蒙殊澤肉眼既明  
自安意吾當為汝作大照明是  
時薩薄即以白晷自纏兩臂蘇  
油灌之然用當炬將諸商人逕於  
七日乃越此闇時諸買客感戴其  
恩慈敬无量各獲安穩喜不自

25、「光明皇后 薩大衆□□」

伝光明皇后筆「蝶鳥下絵経切」「法華経」従地涌出品(41頁a09~15)の断簡。「大聖武」と並んで手鑑の巻頭に配されるべき古筆切である。丁子を全面に吹き付けた料紙に金泥で界線野線を施し、蝶や飛鳥、折枝、草花などの下絵を金銀泥で散らした美麗な経切。「法華経」や「観普賢経」が書写されている。元は開結経を含めた全十巻が書写されたはずであるが、結経の『無量義経』の断簡は見つかっていないようにう

ある。本断簡は他のどこにも紹介されていないので、ここに転載しておく。(図5)。

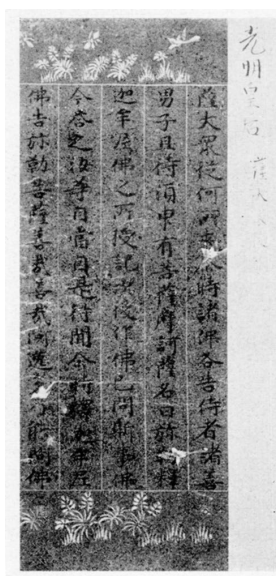


図5

(翻刻)

薩大衆從何所來尔時諸佛各告侍者諸善  
男子且待須臾有菩薩摩訶薩名曰弥勒  
迦牟尼佛之所授記〔次〕後作佛已問斯〔事〕佛  
今答之汝等自當因是得聞尔時釈迦牟尼  
佛告弥勒菩薩善哉善哉阿逸多乃能問佛

26、「弘法大師時世尊即為 (守村)」

「絵因果経」の断簡。本文の内容は『過去現在因果経』卷

四（650頁a22～23）である。上段に絵を、下段に経文を書いている。極め札には「弘法大師」としてあるが、天平時代の写経であることは分かっている。醍醐寺報恩院に卷三上の一巻が完存するほか、上品蓮台寺（巻二上）、東京藝術大学（巻四下）等に卷子本がある。欠脱があり、諸家に分蔵されている。本断簡は、国宝手鑑「翰墨城」に押されている部分に後続する部分である。（図6）



図6

（翻刻）

時世尊即為那提迦

葉伽耶迦葉及諸弟

子現大神變又應其

27、「源順 在久邇京思留寧樂（守村）」

伝源順筆「梅尾切」「万葉集」卷四の目録三行の模写であ

る。「梅尾切」は宮内庁に保管される桂宮本『万葉集』巻四から脱落した断簡の呼称。桂宮本はかつて伏見天皇の所有であったが、いつのころか加賀の前田家の所蔵するところとなった。前田家と桂宮家との婚姻に伴って桂宮家の所有になったらしい。明治に桂宮家が絶えたため御物になったのである。前田家の所有になる以前から切り取りによる脱落は始まっていたらしく、かなり多くの部分が散在し、この散佚部分が、「源順」筆とか、「宗尊親王」筆と称されている。本断簡はその散佚部分に相当するのであるが、実は、この部分は『古筆学大成』や『日本名筆全集』、『三十回手鑑』などに掲出される五行の断簡（後ろに別の箇所二行が貼り継がれている）の最初の三行と一致するのである。字体などは「梅尾切」をよく模しているが、料紙の装飾までは写せていない。桂宮本は色とりどりの染紙に金銀泥を用いて蝶・鳥・草花・流水などを描いた華麗な紙を用いているが、本断簡には本物にはある下絵がないのである。模写と断ずる所以である。本物と比較する参考としてここに掲出することとする。（図7）

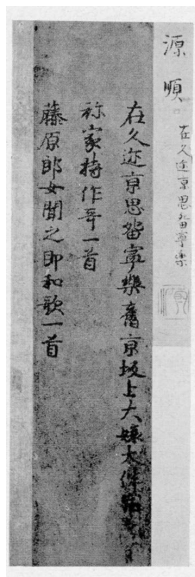


図 7

(翻刻)

在久邇京思留寧樂旧京坂上大嬢大伴宿

村家持作哥一首

藤原郎女聞之即和歌一首

28、「寂然 村雲切」

何故か前述したように、本断簡には極め札が写されていない。見出しもないが、伝寂然筆「村雲切」「貫之集」に紛れもない。『古筆学大成』の他、『日本の書之美』『春敬コレクシオン名品図録』などに原寸大の写真が収められており、飯島春敬氏の所蔵であったことが明らかである。よってこれも割愛する。

29、「源俊頼 閏三月有ける(守村)」

伝源俊頼筆「京極関白集切」の断簡三行である。この断簡については、これまでも多くの先学が触れているので、贅言を慎み、転載を割愛する。なお、右に見る通り、極め札には本文の書き出しを「閏三月有ける」と読んでいるが、「閏三月はへる」と読むべきで、鑑定者の誤読である。『古筆学大成』は目録からの転写を掲げているが、その出所の目録を、『諏訪子爵家他入札目録(大八・三、東美)』と記しているが、大正八年三月二十四日の『子爵諏訪家御藏品・伯爵某家旧御藏品・熱田加藤家御藏品入札目録』には本断簡は見当たらない。あるいはこれも松方家の目録の誤記であろうか。

30、「五條三位俊成卿かすかの、(琴山)」「五條三位俊成卿かすかの、(守村)」

藤原俊成真筆とされる「御家切」「古今和歌集」卷十一、四七八〜四七九番の九行である。この断簡は『古筆学大成』が当松方家の目録の転写を掲出しているので割愛する。

31、「参議雅経卿朱雀院の(守村)」

伝飛鳥井雅経筆「今城切」「古今和歌集」卷九、四二〇〜四二一番の断簡である。すでに藤原教長の真筆であることが

分かっている貴重な古筆切。これも『古筆学大成』に個人蔵として原寸大の写真が掲げられているので割愛する。

なお、目録の九三番に、「嵯峨帝 飯室切残欠巻」という見出しで、写経の卷子の断簡が掲載されている。内容は『金光明最勝王經注釋』卷四（749頁a<sup>34</sup>～b<sup>30</sup>）で、紛れもない「飯室切」である。しかしながら「飯室切」の研究上の意義は、おそらくそこに書き入れられている白筆の加点であろうと思われる。写真では判読が困難であり、翻刻も不可能に近いと考えるので、割愛するしかあるまい。

他に、「光信 稚児草紙 二卷」、「探幽 西行物語 四卷」、「探幽 西行物語 二卷」などの絵巻が載っているが、巻物の一部であり、写真が小さいなど、条件が良くないので、すべて割愛に従う。

（こじま・たかゆき 成城大学名誉教授）